

令和2年1月の解説（週間天気予報）

【1月の天候状況】

上旬は、期間の前半は、北日本では冬型の気圧配置となる日が多くありましたが、東日本と西日本では高気圧に覆われる日が多くありました。期間の後半は、冬型の気圧配置は長続きせず、7日から8日にかけては低気圧が日本海を発達しながら通過したため、東日本と西日本を中心に大荒れの天気となりました。また、南から暖かく湿った空気が流れ込んだため、東日本と西日本を中心に気温は平年を大きく上回りました。沖縄・奄美では、高気圧に覆われやすく晴れの日が多くなったため、日照時間はかなり多くなりました。また、降水量はかなり少なく、降水量の平年比が6%となり、1961年の統計開始以降、1月上旬として最も少ない値を更新しました。

中旬は、全国的に寒気の南下は弱く、低気圧と高気圧が本州付近を交互に通過したため、冬型の気圧配置は長続きしませんでした。低気圧や前線の影響で太平洋側でも雲の広がる日が多くなりましたが、南からの湿った空気の流れ込みは弱く、降水量は少ない所が多くなりました。北日本日本海側では、降水量の平年比が55%となり、1月中旬としては最も少ない値を更新しました。沖縄・奄美では、前線や湿った空気の影響を受けた日もありましたが、高気圧に覆われやすく、降水量は少なくなりました。

下旬は、期間の前半は、低気圧と高気圧が本州付近を交互に通過したため、冬型の気圧配置は長続きしませんでした。期間の後半は、本州の南に前線が停滞し、低気圧が日本付近をゆっくりと通過したため、東日本と西日本を中心に曇りや雨の日が多くなりました。26日から29日にかけては太平洋側を中心に大雨となり、屋久島（鹿児島県）では24時間降水量が284.5mmを観測するなど、6地点で1月の月最大24時間降水量を更新しました。西日本太平洋側と西日本日本海側の降水量は、それぞれ平年比で352%、325%となり、1月下旬としては最も多い値を更新しました。また、低気圧に向かって暖かい空気が流れ込んだため、全国的に気温はかなり高くなり、北日本と東日本ではそれぞれ平年差で+2.8℃、+3.7℃と1月下旬としては1位の高温となりました。

【1月の検証結果】

「降水の有無」の全国平均の適中率（3～7日目平均）は、例年値^{（注）}よりも3ポイント高い77%でした。地方別の適中率では、北海道、東北、東海、北陸、四国、九州北部、九州南部、沖縄の各地方で例年値を上回りました。

最高気温の予報誤差（2～7日目平均）は、全国平均で例年値よりも0.1℃小さい2.0℃で、北海道、四国、九州北部、沖縄の各地方で例年値よりも小さくなりました。また、最低気温の予報誤差（2～7日目平均）は、全国平均で例年値よりも0.4℃小さい1.6℃で、北陸地方で例年値と同じだった以外は、すべての地方で例年値よりも小さくなりました。

（注）例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【3月の週間天気予報の利用にあたって】

3月は、各地方とも次第に暖かくなってきますが、低気圧が接近すると南から暖かい風が吹き込んで気温が上がり、通過後は北からの冷たい風が吹き気温が下がるなど、気温が大きく変動しやすい時期です。4月から5月頃のような暖かさから一転して、1月から2月頃の寒さとなることもあります。週間天気予報の利用にあたっては、天気とともに気温の変化にも留意して下さい。